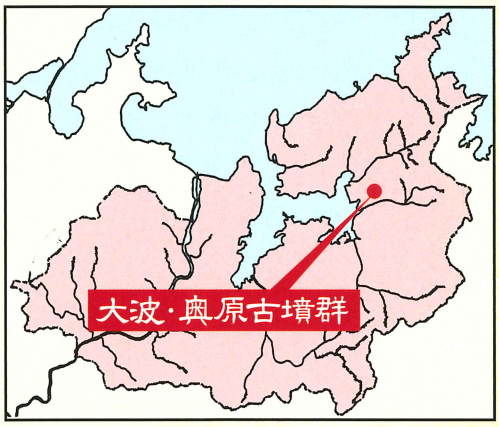
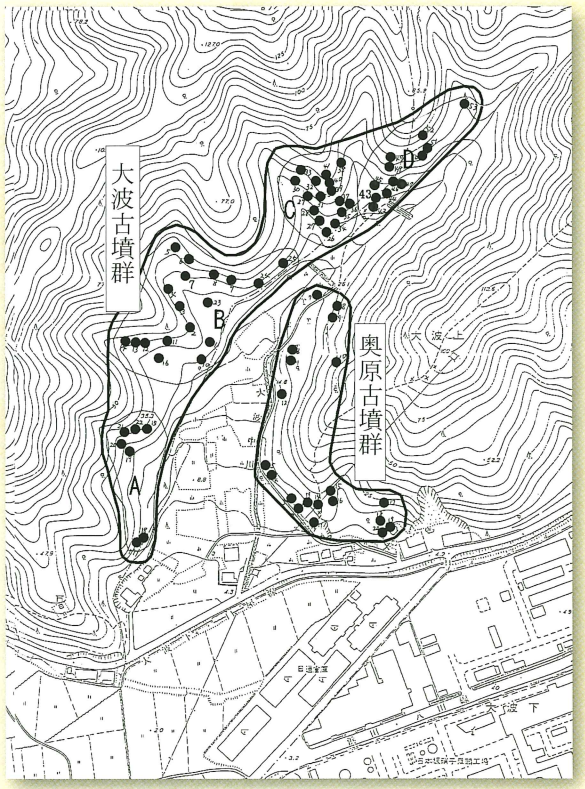
大波（おおば）・奥原（おくはら）古墳群（こふんぐん）

京都府北部における最大級の終末期古墳群

場所：舞鶴市字大波下・大波上



舞鶴市域における古墳時代後期の代表的な古墳群です。現在は舞鶴市の東部にある朝来谷の海から約500m入った北側の全長約500m、最大幅約200mの狭小な谷間の山裾部に広がり、谷中央を流れる大波中川を挟んで西側を大波古墳群（59基）、東側を奥原古墳群（19基）の総数78基の横穴式石室を埋葬主体とする古墳群です。墳丘規模は直径（若しくは一辺）約3m～15mを持つ円墳・方墳で構成されます。発掘調査がされていないため詳細は不明ですが、直径10m以下の墳丘を持つ古墳が大波古墳群で約85%、奥原古墳群で100%と小規模な古墳で群を形成しているのが分かります。大波古墳群中でも初現期と考えられる最大規模の墳丘を持つ7号墳は直径約15m、高さ約2.5mの円形の墳丘を持ち、埋葬施設は長さ15.5m、幅1.2～1.5mの規模を有する無袖の横穴式石室です。古墳群の終末期のものと考えられる大波43号墳は一辺約5m、高さ約1mの方形の墳丘を持ち、幅0.8mを測る簡素化が進んだ横穴式石室となります。7号墳が長大な羨道を持つ無袖の横穴式石室を内部主体とすることから京都府北部域における古墳の編年観から6世紀後半～7世紀初



大波・奥原古墳群　古墳分布図

頭が大波・奥原古墳群の始まりと考えられます。終焉時期は最終段階と考えられる43号墳が、墳丘が一辺5mを測る方墳で主体部は石室を持つものの、長さ4m、幅0.8mを測り、単次埋葬のものと考えられます。このような石室幅が1m以下の石室墳は周辺地域では福知山市下山古墳群、与謝野町解谷1号墳、京丹後市天徳6号墳などがあります。これらは、遅くとも7世紀中頃までに築造された古墳であると考えられており、この頃が大波古墳群の最終段階と考えられます。

以上のように、大波古墳群は6世紀後半から7世紀中頃までに築造された終末期群集墳と考えられています。各古墳は出土遺物や石室の情報が無いものの、墳丘・石室の規模から大きく3群に分けることが可能で、10m以上の墳丘規模を持つⅠ群、10m以下の墳丘規模を持ち石室も縮小させるⅡ群、墳丘が方形のものが多くなり、石室規模がさらに縮小したⅢ群です。これらの古墳群の正確な時期は今後の調査によって明らかにされると思われますが、大枠の時期を推測するならⅠ群が6世紀後半～7世紀初頭、Ⅱ群が7世紀前半、Ⅲ群が7世紀中頃までと思われます。この古墳群の谷を挟んで東側に位置する奥原古墳群は半壊若しくは全壊のものが多いものの、散在する石材の規模からⅡ～Ⅲ群のものと考えられます。また、大波古墳群はその分布状況からA～D群の4群に分割することが可能と考えられます。各群の状況は、A群の20号墳が10m、B群の7号墳が直径15m、C群の32号墳が13mと群中に直径10mを越すⅠ群を中心として残りの多くをⅡ群で構成する一方、D群は直径7m以下の円墳もしくは方墳のⅡ～Ⅲ群で構成されています。このことから、A～C群とD群は造られた時期が異なると考えられます。

大波7号墳　墳丘

この古墳群はこの地域において際立った古墳の多さであり、古墳時代最終段階の様子を示していることから、当時のこの地域を知る上で重要な遺跡であることが考えられます。

大波7号墳　石室